

(1)

喘息発作に対するステロイド療法により侵襲性に変化した慢性肺アスペルギルス症の 1 例

高橋 晴香

石川 立

橋本 みどり

西山 薫

NTT 東日本札幌病院呼吸器内科

(2)

73歳，男性．肺放線菌症の加療中に遺残空洞と好酸球増多を認めた．治療8ヵ月後に喘鳴，呼吸困難が出現し，CTで空洞壁肥厚と気管支粘液栓を認め，喀痰で *Aspergillus fumigatus* が陽性であった．アレルギー性気管支肺アスペルギルス症（ABPA）と診断し，ステロイド療法を行った．治療8日後に侵襲性肺アスペルギルス症（IPA）を発症したが，抗真菌薬の多剤併用療法により改善した．遺残空洞の慢性肺アスペルギルス症から ABPA を発症し，ステロイド療法を契機に IPA に進行したと考えた．

(3)

アレルギー性気管支肺アスペルギルス症，侵襲性肺アスペルギルス症，
ステロイド，抗真菌薬治療，メポリズマブ

Allergic bronchopulmonary aspergillosis , Invasive pulmonary
aspergillosis, Steroid, Antifungal treatment, Mepolizumab

空洞の CPA から ABPA, IPA を発症した 1 例